

り、正に鼠御多門とでもいふべきである。

ネズミダモンバシ 鼠多門橋 金澤城玉泉院丸より金谷出丸へ通ふ爲に、鼠多門から七十間長屋内の間の蝶嬢堀に架けた板橋であつたが、廢藩後金谷出丸は廢地となり、此の橋梁も不用となつた故、明治十年朽折するまゝ遂に取拂はれた。

ネヅカコウ 根津可幸 能美郡小松の俳人。通稱久四郎。所居を老梅園と號した。明治廿二年八十四歳を以て歿。

ネツノ 熱野 石川郡林郷に屬する部落。ネツノノキユウベエ 熱野の久兵衛 石川郡熱野の人。慶長十一年十村を命ぜられ、寛永十一年之を免ぜられた。次代少兵衛は慶安三年に十村となり、承應二年持高之内九反百八拾歩を拜領して御扶持人に進み、三年その職を免ぜられた。子少兵衛翌年御扶持人十村を襲いだ。

ネナシゲサ 根無艸 一册。坂井一調著。『根無艸となり歩行』ともいふ。著者と同時代の人堀麥水の經歷を最も詳しく述べ、次に萬子・北枝・秋の坊・見龍・涼袋・希因等に就いて傳聞の事實を録してある。天明八年の作。著者の號は灌山又は叶翁。一調はその諱である。俳諧を麥水に學んだ。

ネハンエ 涅槃會 藩政時代に、二月十五日寺院に佛涅槃の畫像を掲げて供養し、佛舍利に擬した五色の團子を作つて、堂内又は門内に撒布するを兒童に拾はせた。この日女兒は美服を着け、菓子などを携へて寺院に詣で、終日手鞠を弄んだ。但し眞宗ではこの行事がない。

ネブ 根布 河北郡大根布・本根布・荒屋・

宮坂を根布四ヶ村といひ、又向粟ヶ崎・大根布・本根布・宮坂・荒屋・室・大崎を根布七ヶ村といふこともある。天正十一年四月羽柴秀吉の制札に『大ねぶ・おまへざか・もとねぶ・あら屋』とあるは前者で、同十四年正月前田利家の黒津丹産子村付の印書に、『ねぶ七村』とあるは後者である。根布の名は、この附近が砂丘で、多く合歌木を生ずる爲であらうといはれる。

ネブノアメシユウ 合歡雨集 一册。廣島の俳人篤老編。文化十一年同地利泉屋新藏板。關更十七回忌に當り、編者は廣島長遠寺にて追善の爲に百韻を興行し、之に諸家の句をも收めたものである。その序文中に、關更の京都高臺寺に於ける墳墓のこと、及びその傳記などが書かれてある。

ネブライシ 砥石 能登には砂質凝灰岩・凝灰砂岩の累層を被覆して、砂・粘土・礫等から成る若き地層がある。この層の粘土は瓦の材料となるものであるが、他に屢黒曜石様の玻璃質の岩塊を含み、これが風化し粘土化する時、その殘骸を止めて、結核様の外觀を呈する。それを砥り石といひ、粘土中にその多數を含むことがある。珠洲郡小木・上戸・石坂・平床の佛体石、鹿島郡能登島の布袋石はこれである。

ネヤ 閨 鹿島郡能登島庄に屬する部落。能登誌に、臥行者が常に眠つてゐた所だから邑名が起つたとするが、全く虚談である。文明十三年正月向田代官三階家吉の判書には、隣邑の無關と共に閨牟關と續けて、一村の如くに書いて在る。

ネヤクシヨ 根役所 藩政時代に、主管の役所をいうた。例へば御郡奉行は、その管内

に出張して事務を執ることもあるが、根役所は御算用場内に在る御郡所である如きをいふ。

ネリガヤチカンノン 練ヶ谷内觀音 鹿島郡江曾に在る。能登名跡志に、『當國觀音順禮八番札所練ヶ谷觀音は寺なし。八町許山へ登る也。あら木の山刀作りの儘の尊像六林あり。運慶の作也。江曾村の山にて、あさまなる堂也。』とある。

ネリコ 練子 羽咋郡南吉田の内の小宇。未森戦の時、守將土肥伊豫ネリコに討つて出で、遂に吉田口苔丸といふ門際で戰死したとある。

ネンガ 年賀 藩侯に對する年賀は、之を年頭御禮の項に述べた。年寄等高祿の士に在つても、主人は三ヶ日の間に、その家來・給人から年頭の祝詞を受け、この際に於ける主人の服裝は熨斗目・麻上下を用ひ、家來・給人も之に同じが、扶持方の者では熨斗目を用ひぬ者もあつた。その他醫師は熨斗目・十徳を、中小姓・小姓は服紗小袖を着けた。奥向では、年寄衆の夫人は蓑入に結髪し、銀笄を挿み、緋縮緬などの上着に帯を前結びとし、地赤又は地黒の襦袢を着た。老女も亦之に準ずるが、中老以下近習の者は紋服の上に小散を被ひ、御次以下は紋服のみを用ひた。而して老女・中老・近習等は夫人に對して祝辭を述べるが、御次以下はその事なく、男子にして祝辭を述べ得るものは、獨輿用人と醫師とのみであつた。人持以下平士の家に於いても、亦その地位に應ずる儀式を行ひ、町方に在つても大商家の主人は、番頭・手代・丁稚の年賀を受けるものがあつた。三ヶ日間は、又諸

士互に訪問して祝詞を交換した。賀客は必ず座敷に入り、式臺から辭し去る如きことはない。賀客を迎へる者は、先づ熨斗三方を供し、客は双手又は隻手を以て之を戴くが如き態をなし、然る後祝詞を述べた。小祿の家に在つては、夫人自ら之を取扱ひ、紋服の上に小散しを着て客に接した。藩末に至り、婦人の小散しを省きて紋服のみとし、男子の熨斗目・麻上下は服紗小袖・麻上下となつた。凡そ三ヶ日の間に於いて士人の來往する者、秩祿二三千石以上は皆馬に乗り、役儀と祿高とによつて、先拂あると無きと、兩若黨なると一人なるとあつたが、必ず鎗と挾箱とを伴ひ、小身の士・奥力・歩は小者一人のみを従へた。小者の着用する合羽は赭色なるを普通とするが、年寄本多氏のみは栗色であつた。商人の豪富なる者の廻禮にも亦桐油合羽を着た一僕を伴うた。正月の大雪なる年には、藩令によつて二月に廻禮を行ふこともあつた。

ネンゴウカベ 年號壁 ↓カトウトウベエ 加藤藤兵衛。ネンサイイツシヨウ 燃犀一照 三册。富田景周著。蓋し天明元辛丑秋の横山政禮の序に詩家藥籠と記し、同五年乙巳春景周の自序に至つて燃犀一照と改めたので、景周は去年以來小松城番に赴任して居たから再訂を加へたのであつた。古詩に見える字句を摘み、その用例を擧げて作詩に便したもので、第一巻を天文・地理・居處・人物・人事・身軀・數量・器財、第二巻を草木・禽獸・蟲・浮屠・虛字・事實、第三巻を摘句・配韻六十篇に分かつて居る。

ネンサイチヨウ 念西町 金澤の舊町名。今廢せられて木町四番丁となつた。淨土宗如